

一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

道徳の効力の限界といえ、いろいろと思ひ当たることがある。ある中学の先生が新聞にトウシヨ^①しているのを読んで、印象深かった。その先生は、いじめをしている生徒たちに、それがどんなに悪いことを真剣に説得して、いじめをやめさせようとしたが、その説得がまったく通じなかったという体験を語り、驚きとゼツボウ感を示していた。

A、ぼくは思う。道徳的説得が通じないのは、じつは少しも驚くべきことではないのではあるまいか。真剣な道徳的説得は必ずひとの心をとらえるはずだというのは、いつかどこかで（ある目的のために）つくられたへうそではあるまいか。重要なことは、このへうそを信じている人は、それを信じていない人に対して無力であり、せいぜいのところ、ただ「軽蔑」とか「侮蔑」という武器で対処できるだけだ、ということだ。よき教師たらんとするなら、このへうそを信じ込むのではなく、うそと知りつづきに^②応じて利用できるだけの力量を身につけなければならない、とぼくは思う。

善いことをするドウキの方は、けつこうやつかいな問題がからんでいるようだ。道徳的行為も利己的観点から選ばれた一戦術にすぎない、とぼくは言った。この考えは、どんな自己犠牲的な「崇高な」行為だって、そうしたくてそうする以上、結局は自分の幸福（つまり自己満足）のための行為でしかない、という考えだ。これは正しいだろうか。子どものころぼくはこんなふうに考えていた。

人間は結局、自分のやりたいことしかやらない。いや、自分のやりたいことしかやれない、と言ってもいい。いやいやながらそうする、という場合だって、与えられたその状況で出来ることの中では、一番やりたいことをやっているはずだ。

学校なんか行きたくないと思ひながらも毎日学校に通っているなら、サボってどこかで遊んでいた、登校拒否したりするよりは、結局はその方が自分にとって好いと思つてそうしているはずだ。サボったり登校拒否したりすれば、親や教師がうるさいことを言うに決まっているからね。そのくらいなら、おとなしく学校に通っていた方が好いというわけだ。

強盗に拳銃を突きつけられて金庫を開けるように命令された銀行員だって、同じことだ。与えられたその状況では、金庫を開ける方が自分にとって好いと思うからこそ金庫を開けるのであって、金庫を開けるくらいなら死んだ方がましだと思えば、開けない

だろう（ついでに言えば、銀行員がそういう正常な利己心を持たない人物であつた場合には、強盗の方が窮地に立たされることになる。強盗にとつて欲しいのは金庫の中の金であつて、銀行員の命などは、自分が殺人犯になつてしまふだけで、何の価値もないからだ。今度は強盗の方が、正常な利己心に従うかどうかの選択を迫られることになる。つまり、一方が死の恐怖を超えたことで、強者と弱者が逆転する、というわけである）。

溺れかけている人を助けるときだつて同じことだ。助けたいと思うのは、その状況で何もしないでいる自分にたえられないからで、危険を冒しても助ける方が自分にとつて好いと思うからだろう。B、道徳をたたき込まれている人にとつては、悪いことをするのは、自分にとつて嫌なことになるだろう。だから、しないのだ。道徳をたたき込まれていなくても、道徳的評価がツウヨウしている世界では、少なくとも人に知られるような状況では、たたき込まれている人と同じように振る舞うだろう。その方が好いからだ。

だから結局、人間は徹Ⅰ徹Ⅱ利己主義者で、自分にとつて好いことしかやらない、ということになる。でも、これはほんとうだろうか。

困つたことに、道徳に関する議論の場合いつもそうなのだが、こういう議論に接するとたんに反感を感じてⅢがⅣでも反論したくなつてしまふ人がいるようだ。そういうわけで、こういう考えにはすでにいくつもの反論がある。その中には、人は直接自分の幸福なんかを目標さない方が結果としてそれが得られることが多い、なんてまったくまとはずれな議論もある。でもよく考えたところでは、問題はそういう事実問題にあるのではなく、いわばもつと論理的なところにあるようだ。

問題は、人間はみな利己主義者で自分にとつて好いことしかやらない、というこの原理が、経験的事実を述べたものなのか、それとも経験に先立つ人間理解の枠組みを述べたものなのか、という点にある。経験的事実を述べたものとすれば、それは人間という生き物を調べてみたら（調べたすべてのケースにおいて）人間はこの原理に従つて行動していた、ということであつて、ひよつとしたらこの原理に従わないケースもあるかもしれない、ということになる。

でも、経験に先立つ枠組みを述べたものなら、この原理には例外はないことになる。どんな精神状態でどんな行動をしようと、

まともな人間はつねに必ず自分にとつて好いことだけをしようとしている、そうとらえたとき、はじめて人間の行動は理解可能なものになる、というわけだ。ちょうど、自然そのものが因果的に出来ているかどうかはわからないけれど、因果的にとらえられたときわれわれに理解可能となる（ゆえにわれわれに理解できる自然はすべて因果的なあり方をしている）という議論と同じだ。人間の行為は利己的なものとしてとらえたとき、われわれに理解可能なものとなる（ゆえにわれわれに理解できる人間の行為はすべて利己的なあり方をしている）というわけだ。

経験的事実に関する利己説についていえば、多くの実感では、これはかなり正しい。何よりも、このような主張に反感を示す人自身がこのような主張の実例でしかない、というケースを、何度も体験したから。でも、そんなことはたいしたことじゃない。重要なことは、人間理解の枠組みに関する利己説をとると、経験的事実に関する利己説は主張できなくなる、ということだ。どんな人間も利己的であることがはじめから決まっているなら、あいつもやつぱり利己的だなんて発見する余地ははじめからなくなつてしまふ。自然が因果的であるに決まっているなら、この現象にもやつぱり原因があつたなんて驚く余地がなくなるのと同じだ。

C、重要なことは、あいつもやつぱり利己的だった、というような発見ができるような「利己的」の意味と、だれでもどんなときでも利己的である、というときの「利己的」の意味とを、区別することだ。発見ができるということは、もちろん、逆の発見（あいつはぜんぜん利己的でない！）もできるということである。D、道徳性に対立する利己性と道徳性を包み込んだ利己性を区別しなくてはならないのだ。

道徳性に対立する利己性のケンチからいえば、人は道徳的であつたり利己的であつたりする。この場合には、「私にとつては好いことなんだけど、悪いことだからやらない」とか「私にとつては嫌なことなんだけど、善いことだからやる」といったことが言える。

道徳性を包み込んだ利己性のケンチからいえば、人は道徳的であることにおいてなお利己的である。その場合には、「私にとつては好いことなんだけど、悪いことだからやらない」のは、「悪い」と思うことによつて、そのことが私にとつて嫌なことになつたからである。「私にとつては嫌なことなんだけど、善いことだからやる」のは、「善い」と思うことによつて、そのことが私にとつ

て好いことになったからである。そして、そうなるかどうかは時と場合によって違う。でも、いずれにしても、人間は自分にとって好いことしかやらないし、そもそもやれないのだ。そして、何が自分にとって好いことで何が嫌なことになるかは、たいていの場合、その人の受けた教育や人柄や好みによって決まるだろう。

(永井均『子どもへのための哲学』より)

問一 部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A D に入る適当な語句を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度以上使ってはけません)

ア でも イ また ウ だから エ つまり オ まるで

問三 部1「それ」の示す内容を三十字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問四 部2「善い」と部4「好い」は、問題文中においてどのような使い分けがなされているか五十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問五 部3「登校」と同じ組み立ての二字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 国立 イ 遅刻 ウ 墨汁 エ 満足

問六 I IV に入る漢字の組合せとして、適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	I 心	II 腸	III 一	IV 十
イ	I 首	II 尾	III 吉	IV 凶
ウ	I 頭	II 首	III 朝	IV 夕
エ	I 頭	II 尾	III 是	IV 非

問七 部5「この原理」の内容を示す部分を「ということ。」につながる形で三十字以内で本文中から抜き出しなさい。

問八 部6「人間理解の枠組みに関する利己説」とはどういうことですか。七十字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問九 問題文の内容として、ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いじめをしている生徒に道徳的説得が通じないのは当然のことであり、教師は良き教師になるための力量を身につけるべきである。

イ 正常な利己心を持たない人間ほど強い人間はおらず、強者と思われる者でさえ、弱者に転落させるだけの大きな精神力を持っている。

ウ 人間は自分の都合にしたがって行動するので、道徳的行為も他人の迷惑を考えず、自己の利益だけのために選択されたことではない。

エ 人間は直接自分の幸福を求めない方が、結果として得られるものが多いというのは理想論に過ぎず、道徳の限界を感じざるを得ない。

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「どうしたのセン、焼けちゃって」

お母さんが夕食の時に気が付いて、はすむかいから言った。私の手の甲は、確かに朝より茶色がかっている。

「山行ったの」

持っていたお椀わんを置いて言うのと、右隣に座ったお父さんからすかさず質問が飛んだ。

「誰とよ」

私は、さっきまでキンおじちゃんがつまんでいた青マメが食卓の隅に残っているのに目をやりながら、

「じいちゃんとキンおじちゃん」

と答えた。お父さんの細い眉がぴくりと動く。カチヨウ席についたじいちゃんは何も言わないで、黙々とご飯を食べていた。その横のばあちゃんが、

「とうさんと、欽二さんと、なあ」

と説明的に付け足した。私はどきどきしながら

「うん」

と言う。夕食の直前までだらだら青マメをつまんでいたキンおじちゃんを、お父さんがいかにも邪魔くさいと言いたげなしかめ面しかめづらで見ていたのを思い出す。

お父さんは東京から来た婿むこで、この辺りの親族や近所同士のなれなれしいさまを良く思っていない。小さい私にさえわかっていた。

お父さんが黙り込み、食卓に若干気まずい空気が流れた。これは何とかしなくてはと、私は子どもらしい責任感で口を開く。

「ねえねえ、塔子ちゃんは大島行くんだって。夏休み中に」

話題は大幅に飛んだけれど、お母さんは

「へえ、どこの大島かしら」

と答えてくれた。

「どこの大島って、大島だよ」

「セン、大島って島はたくさんあるのよ」

「ふうん」

食器が I 人分、かちやかちやと音を立てている。じいちゃんと同じく、さっきからイツサイ口を開いていないのが、私の真正面に座った妹のチエミだった。お母さんの横で、ゆっくりと何かをかみつぶしている。

チエミの皿の中身はさっぱり減らない。ほんの二つしか年が違わないのに、私のよりずっと小さい手の中で、箸が止まってしまっている。

「たくさんあるって、どこにあるの」

私がそう口にしたところで、チエミが

「あとごちそうさま」

と箸を置いた。白いご飯はもうほとんどなかったけれど、ピーマンと豚肉のしょうが炒めは、皿に山盛りのまま残っている。

「チエ、もういいの?」

「おなかいっぱいな」

か細い声でチエミが答えた。こん、とチエミが咳をするとお母さんは

「じゃあ歯、みがいたげるからテレビ見て待ってなさい」

と言った。チエミがこくんとうなづく。

私は、時計と目の前のおかずが盛られた皿とをコウゴに見やった。もうすぐ七時で、「ドラゴンボール」が始まってしまう。なのに目の前の皿には、肉から巧妙に除けられたピーマンが、ごろごろと横たわっていた。

試しにチエミと同じように

「あとごちそうさま」

と言つて箸を置いてみたけれど、

「ばがオメ、ピーマン残ってるねが」

とばあちゃんに「喝いっかつされただけだった。

席を立ててテレビのある部屋に行こうとしたチエミが、横目にこちらを見た気がした。チエミばかりずるい、と言つても無駄なのは知っていた。チエミはぜんそく持ちで、とくべつ扱いされて当然なのだ。

——でもさっきの咳はわざとだ、ぜったいにそうだ。チエミもピーマン嫌いだもん。

ブスツとした私の横から、お父さんの長い箸が伸びてきて、ピーマンを二、三個、取つていつてくれた。お母さんが「残りは食べなさいね」と先生のように言う。

廊下を隔てたふすまの向こうから、「ドラゴンボール」のテーマ曲がかすかに聞こえる。

——いいんだ。あとで缶コーヒーへ昼間、山でキンおじちゃんからもらったもの、チエミに見せびらかしてやる。

私はピーマンを口の中へ突つ込んで、大量の水とともにぐじゅぐじゅにかんで飲み下した。水でうすまるはずなのに、ピーマンの苦味は口じゅうをじわじわ責めたてた。

チエミはとて「からだ2が弱い」んだそうだ。

確かに、チエミがすごく小さかった時に、色んなチューブやコードをからだにくつつけて入院しているのを見たキオク4があるから、そうなんだろうなと思う。

けれども、友達のきょうだいと違いすぎるので時々戸惑とまどった。みんなのきょうだいは、どこへでも行けて、走り回れるのに、チエミはそうじゃないのだ。私はチエミのせいで遠くへ行けないことがあった。塔子ちゃんと、塔子ちゃんの兄さんと、茜ちゃんあかねと、それから二軒隣で二つ上のマーちゃん、みんなが集まって遊ぶことが多いけど、海に行ったり山に行ったりする時、私とチエミは

残される。チエミの「からだ2が弱い」から。そして、チエミをひとりで置いていたらかわいそうだから。

本当にかわいそうなんだろうか、この子はひとりでも平気なんじゃないだろうかと、ひそかに思っているのだけれど、とにかくお母さんは

「みんなと遊ぶ時、チエミだけ置いてけぼりにしちゃだめよ」

と言うのだった。本人に聞いてみなければわからないか、と思うけれど、聞くこと自体が残酷なのだろうと、子どもなりに漠然と知っていた。だから私はチエミと残った。海釣りに行ったことも、森に探検に行ったこともなかった。海なんて学校のすぐ裏なのに、寄り道は禁止だし、帰ってから戻るにはちよつと距離が遠いしで、なかなか遊びにいけなかった。何よりこの「夏休み」に入ってから、集落の子はみんな海に行つてばかりだというのに、私とチエミは一度も行っていない。

「今日も海なの？ たまにはこの辺で遊ぼうよ」

誘いにきた子に言つてみる。みんなは既に、浮き輪やシュノーケルやシャベルの入ったミニバケツなんかをそれぞれ持つている。

「だって暑いもん。ねえ、いいじゃん、チエちゃんはルスパン5で。センちゃん、行こうよ」

友達のを断る時、チエミは隣でじつと私の顔を見上げている。その切実な視線は、

Ⅱ。

「……ごめん、絶対怒られるし。行かない」

「そお？」

首を傾げて玄關を出て行くみんなを、チエミはどこか誇らしげな顔で見送っている。その真意はわからない。ただ私は、チエミを邪魔だなあと5思つてしまわないうに、強く強く意識している。

(豊島ミホ「夜の朝顔」より)

問一 — 部①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〰部1「子どもらしい責任感」からうかがわれる私の気持ちとして、適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもらしい遊びに興味を示さない後ろめたさを、父親だけには気づかれないと思っている。
 イ 私の日焼けの理由が原因で、悪くなった夕食の雰囲気、話題を変えることで打開しようとしている。
 ウ 父の好物の青マメを無神経につまんでいたキンおじちゃんと父との関係を、間に立って改善しようとしている。
 エ 一家水入らずの夕食の話題は、家族のことだけにしたいという父親の気持ちをできるだけくみ取ろうとしている。

問三 I に入る適当な漢数字（一字）を答えなさい。

問四 〰部2「『からだが弱い』んだそうだ」から感じられる私の気持ちを三十字以内で説明しなさい。（句読点も字数にくみます）

問五 〰部3「聞くこと自体が」の説明として、適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア チエミに対して、ひとりで平気かどうかという疑問を突きつけても、彼女は答えを持ってないことが何となく私には理解できているということ。
 イ チエミの年代では、病状に対する知識も乏しいため、家族が常に気に掛けていなければならないことを私は重荷に感じているということ。
 ウ チエミと過ごすことができる残された時間の短さを、子どもながらに私はうすうす感じているということ。
 エ チエミの打算的な性格を快く思っていなかった私だが、姉としての立場からは逃げられない自分を恨めしく思っているということ。

問六 〰部4「ばかり」と同じ用法のものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア その映画はまだ始まったばかりだから、だいじょうぶだよ。
 イ 彼は倒れんばかりにゴールしてトップを守り抜いた。
 ウ 東京駅八時着予定の新幹線は、三分ばかり遅れて到着した。
 エ 部屋でゲームばかりしていないで、外で運動でもしていращい。

問七 II に入る適当なことを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 優しくて温かい イ けなげでいとおしい ウ 悲しくて怖い エ 暗くてむなし

問八 〰部5「チエミはどこか」のチエミの気持ちを五十字以内で説明しなさい。（句読点も字数にくみます）

問九 〰部6「チエミを邪魔だなあ」の理由として、適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
 ア いつも妹と比べ続けられ、損な役回りに甘んじてきたことに限界を感じ、自分らしさを発揮していこうと決意したから。

イ 妹の存在によって、友人との関係もぎこちなくなりつつある状況を受け入れるしかない弱い自分を情けなく思い始めたから。

ウ 妹のために多くを犠牲にし、がまんしてきた結果、彼女をうとましく思ってしまうような自分に気づいているから。
 エ 妹には許すことを自分には許さない両親への不満を、つい彼女にぶつけてしまいがちな自分にいや気がさしたから。

問一	
①	
②	
③	
④	
⑤	

問一	A	
	B	
	C	
	D	

[illegible][illegible]

問五	
問六	

[illegible]

問九	
----	--

[illegible]

問一	
①	
②	
③	
④	
⑤	

問二	
問三	

[illegible]

問五	
問六	
問七	

[illegible]

問九

受験番号	
氏名	

得点